

# 音読潜時と発話のしにくさの自覚の関連の調査

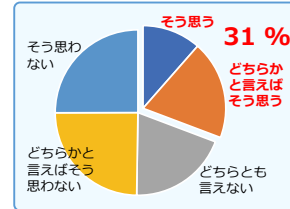
☆中野智貴 北村達也(甲南大) 能田由紀子(国語研) 正木信夫(ATR)

## 背景

健常者の中にも発話のしにくさを自覚している人が一定数存在する。

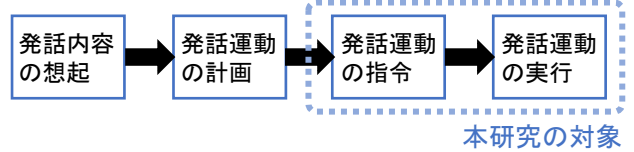
北村ら (2019)

発音がうまくいかないことがありますか？



## Research question

発話のしにくさの自覚は発話過程のどの段階に起因する？



発話のしにくさの自覚には発話過程のいずれかの段階における時間的な滞りが関与していると仮定し、音読潜時の調査を行う。

## 研究方法

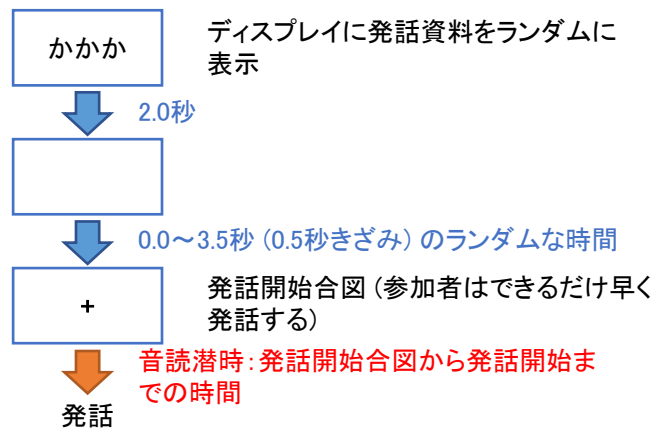
参加者: 20代の男女計32名

- ・発話・聴覚に関する問題なし
- ・利き手に関する条件なし

発話資料: 「か」「た」から成る無意味語 (3, 4モーラ)

| Initial consonant | Syllable sequence | Number of syllables |            |
|-------------------|-------------------|---------------------|------------|
|                   |                   | 3                   | 4          |
| /k/               | Same              | /kakaka/            | /kakakaka/ |
|                   | Different         | /kataka/            | /katakata/ |
| /t/               | Same              | /tatata/            | /tatatata/ |
|                   | Different         | /takata/            | /takataka/ |

発話のしにくさの自覚のアンケート調査



## 結果

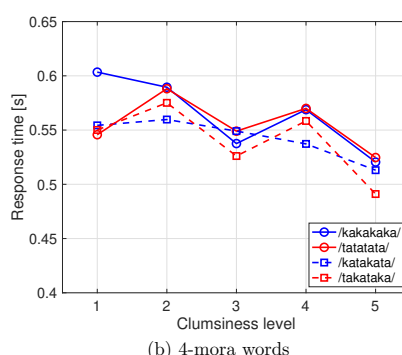
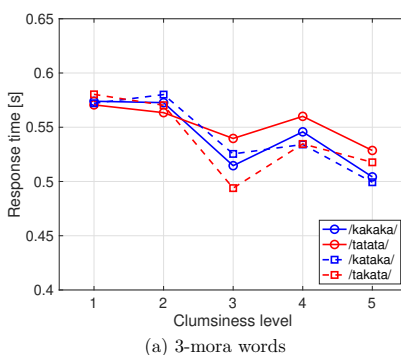


図: 発話のしにくさの自覚と音読潜時の関係。横軸は5段階の発話のしにくさの程度を表す。「ある」が1, 「ない」が5に対応。

### 4要因の分散分析

- ・発話のしにくさの自覚 ←有意 ( $p = 0.004$ )
- ・モーラ数
- ・語頭子音 (/k/ or /t/)
- ・音素連鎖パターン (連続 or 交互)

### 発話のしにくさの程度と人数

1. ある: 3名
2. どちらかといえばある: 15名
3. どちらともいえない・わからない: 2名
4. どちらかといえばない: 8名
5. ない: 4名

## 考察

- ・発話のしにくさの自覚の程度は音読潜時に有意に影響する。
- ・発話のしにくさを自覚する人は、そうでない人より発話運動の指令・実行がスムーズではないのでは？
- ・結論づけるには参加者が不足している。

## まとめ

発話のしにくさの自覚と発話運動の指令・実行に関する潜時との関係を調査し、これらの間の関連を示す結果を得た。今後、実験参加者を増やすとともに、発話内容の想起や発話運動の計画との関連についても調査する。